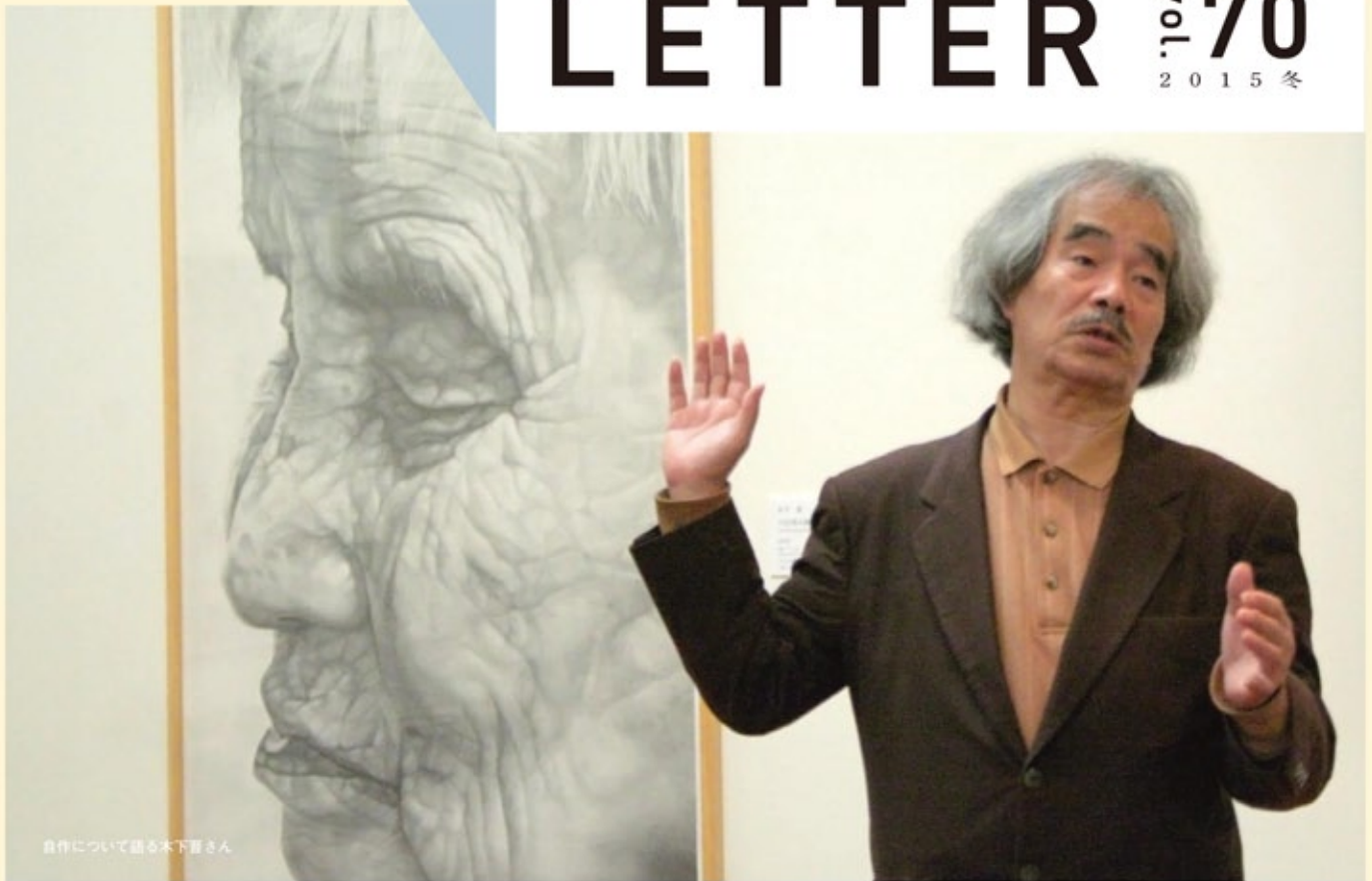


ART KISS

LETTER Vol. 70

2015 冬



自作について語る木下晋さん

巻頭言

鉛筆のチカラ — 情念を超えて

鉛筆画と言えば、最近目黒区美術館で展示されていた藤田嗣治の人物像三点が印象的だった。近代ではフランス人アングルの鉛筆画が突出するが、鉛筆を生み出した英国では、ロセッティやパーンジョーンズ等のラファエル前派が、その時代を濃厚に反映する流麗でロマンティックな作品を残している。ピカソは何を使用しても卓越していたが、彼の鉛筆画も味わいの深いものであった。しかしどれだけ優れていても、鉛筆画は彼等の仕事を代表するものではなかった。やはり本画やタブローと言われるものが、美術史的にも彼等のアイデンティティとなっている。このような流れの中で、木下晋と吉村芳生においては、鉛筆画こそが彼らの創造行為の本領であり、その大掛かりな規模と迫力ある表現は、現代美術の世界でも際立った存在感を放っている。

吉村芳生には、その表現のダイナミズムの中に、新しいアートの創造を目指す「反芸術」の流れを見て取ることができる。まるで「純粹芸術」と言われるものを否定するかのようだが、彼の物理的な単純作業によって生み出される作品は、見る距離によって様相が著しく変わり、距離を置いた時に見せる美しさは傑出して見える。極めてラディカルな現代の意味を持った作品と言える。

木下晋は、人間の老いや病、そして過酷な人生の痕跡を克明に、しかも大きなスケールで描いてきた。彼は、障害を持った人々を特別にテーマとしてきたわけではなく、彼等とは「偶然に出会ったもの」と言う。そしてその出会いは運命的であり、彼等を描くことの強い衝動と必然性を木下にもたらしたのである。注目すべきは、対象への木下の冷徹な直視が、描くという行為があつて初めて可能となったことだ。情感に感わされることのないこの優れて客観的で知的な対峙がなければ、これほどの深く豊かな作品の創出はあり得なかつたであろう。

今回の二人展では、鉛筆が、人間の深部まで明かす圧倒的なチカラをもつことを明かしている。

熊本市現代美術館館長 桜井武

詩の朗読会

くまもと詩の朗読の会共催の自作の詩の朗読会です

詩の朗読会 第131回 テーマ「幻想(空想)」

2014.10.23



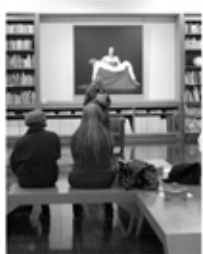
「天野喜孝展 想像を超えた世界」の展覧会に合わせて、「幻想(空想)」をテーマに朗読会が行われました。飛び入り参加4名を含む、14名の方が発表しました。

現実と夢との境目はどこにあるのか、内に膨らむ幻想を追い求めた非現実的な表現が並びました。まるで深い底なし沼に足を踏み入れたような感覚だったり、日常生活を切り取った一瞬間に想いを馳せる情景だったりと、一気にその世界観に引き込まれました。今回飛び入りの参加者が読まれた草野心平さんの詩は、読み手の爽やかな声の響きと独特な言葉の表現が合わさっており、とても印象的でした。その他にも「生きていくこと自体が幻想なのかもしれない」という言葉に思わずハッと息をのみ自分の周りを確認してしまうなど、幻想世界の魅惑に満たされた時間でした。(N・H)

【参加人数14人】

詩の朗読会 第132回 テーマ「自由題」

2014.11.27



飛び入り参加4名を含む、17名の方が詩を発表されました。テーマが「自由題」

ということもあり、好きなエッセイの一つや、花や動物についてなど内容は様々でした。中でも「生きる道」や「俺の道をいく」など、

「生きる」ということを表現した詩が多くあり、その人の歩みや強い思いに心動かされました。また、ラファディオ・ハーンに関連した作品を2名の方が詠まれました。「おしどり」の朗読や、ハーンの瞳に映る世界を独創的に表現された自作の詩も印象的でした。(Y・M)

【参加人数17人】

CAMKEESの活動

美術館ボランティアCAMKEESキャンキースによる活動紹介

CAMKEES研修旅行

2014.9.30



当館のボランティアCAMKEES(キャンキース)の皆さんと研修旅行に行ってきました。福岡アジア美術館で開催していた「第5回福岡アジア美術館トリエンナーレ2014」の鑑賞後、福岡アジア美術館ボランティアの皆さんと交流会を行いました。アジア21カ国・地域の最新アートの展示に、「もつとじつくり作品を見たい!」という声もあがっていました。交流会では色々な質問が出て、活発な意見交換が行われていました。福岡アジア美術館のスタッフの方々によるおもてなしが心に残る一日となりました。(E・Z)

【参加人数23人】

CAMK「読みがたり」第62回 テーマ「楽しい秋」

2014.10.18

今回のテーマは「楽しい秋」。絵本の中では、黄色やオレンジといった秋の色や、り

んごやみかんなど美味しそうな果物が登場しました。お母さんお父さんと一緒に、とって可愛い赤ちゃんたちが参加してくれたので、「りんごのほっぺ」「だるまさん」など親子で触れ合う手遊びを中心にお話をしました。「かくかくかくれんぼ」「おつきさまえらいの」「にぎりばつちり」などのシフォンを使ったお話では、シフォンのふわふわした柔らかな動きをしっかりと目で追いつながら、手を伸ばしてみたり、興味津々だった子どもたち。お父さんやお母さんのお膝の上で、最後まで心地良さそうに聴いていました。(N・H)

【参加人数7人】

CAMK「読みがたり」第63回 テーマ「どうぶつ」

2014.11.15



今回のテーマは「どうぶつ」。赤ちゃんとうぶつ。赤ちゃんとママのペアが聴きに来てくれました。紹介した絵本「でっこい、でっこい」では、「でっこい、でっこい」といってペー

ジをめくると、ゾウが出てきたり、ゴリラが出てきたり。また、絵本「ねずみがばくつ!」では、ねずみがばくつ!とかみついたものは、実はねこのしっぽで、おどろいたねこがかみついたものは…と、いろいろな動物がながつていきました。「ぐるぐるぐる」といったオノマトペに子どもたちは黄色い歓声をあげていました。その他、絵本「どうぶつのおかささん」、「はげはげはば」、「とつとつとつとつとつ」、「手遊び「うまは」としし」などを紹介しました。赤ちゃんの笑い声が最後まで賑やかな会となりました。(K・O)

【参加人数11人】

ホームギャラリーからのお便り

ホームギャラリーからおすすめの1冊をご紹介します。

VOL.23 「私写真論」



著者: 加沢耕太郎
出版: 筑摩書房 2000年

写真。という存在は、ずいぶん身近なものになりました。機材や手法を問わなければ、それは日常のあらゆる場面に存在し、気軽に「今」をつつしだすことのできるツールとして、広く浸透しています。今回は、写真そのものではなく、その写真を撮るに至った「私」という存在にスポットをあてた本をご紹介します。

「私写真論」では、中平卓馬、深瀬昌久、荒木経惟、牛嶋茂雄といった写真家たちの撮る写真作品の中で、「私写真(II)私」に直接向き合い、その生の経験を写真によって提示していく」とは何か? 「私」にとって、それはどんなものを意味するのか? 場所によって、あるいは環境によって、「私」はどのように変わるのか? などのテーマで、「私写真」としての私写真作品を見つめてゆきます。

また、写真家たちが生きる時代背景や、写真が撮影された時期がわかりやすく説明され、写真作品に対する写真家たち本人の言葉が綴られているので、むずかしい部分はさておき、純粋に写真作品と、その解説を楽しむことができます。一冊となっています。

さらに、本書でとりあげられている荒木経惟・古原誠一両氏は、熊本市現代美術館で過去に展覧会を開催した作家でもありますので、関連書籍として、ぜひ「荒木経惟 熊本ララバイ」、「古原誠一メモワール」の図録も併せてご覧下さい。身近な写真。という存在の、新しい一面が見えてくるかもしれません。(K・H)

ミュージック・ウエーブ

展覧会や季節にあわせたコンサートを開催しています

STREET ART-PLEX KUMAMOTO協働事業
Great Composer Memorial Series
Frédéric Chopin

2014.10.18



10月17日のショパンの命日にちなんだコンサートを開催しました。今回は、熊本在住の若手演奏家を中心に、ピアノ曲の他、歌曲も披露。コンサートでは、「幻想即興曲」や「エオリアンハーブ」、「別れの曲」などに加え、ショパンに縁のある作曲家シューベルトやブラームスの曲も聴くことができました。また、歌曲「乙女の願い」では、表情豊かな歌声とピアノの演奏が観客の皆さんを魅了していました。(Y・M) 【参加人数80人】

STREET ART-PLEX KUMAMOTO協働事業
EXTRAVAGANZA 2014
Don't let the door close - the secret eight doors-

2014.10.18



熊本市中心市街地のストリート上で、同時並行で行われる「EXTRAVAGANZA」は、音楽やダンス、様々な表現スタイルを身近で楽しめるイベントです。当館ホームギャラリーでは、3組のパフォーマーが出演しました。1組目は、ダンス×JAZZユニットmarble。ジャジーな演奏とインパクトの

ある衣装を纏ったコンテンポラリーダンスの組み合わせは、愉快で温かな気持ちになり、現実からふっと離れるような感覚がありました！2組目のThat'sは、都内でライブ活動をする、トランペット、バイオリン、チェロ、パーカッションによる男女4人のグループです。様々なジャンルを演奏されるというThat'sは、カバー曲やオリジナルを含む5曲を披露。アコースティックな演奏の中にもエネルギーが溢れていました！3組目は、シンガーソングライター・Angela Owensさんのピアノの弾き語り。熊本出身のAngelaさんは、英語歌詞と日本語歌詞の両方で歌い、しっとりとした曲を中心に、心に響く歌声で会場を大いに盛り上げてくださいました！(Y・M) 【参加人数60人】

STREET ART-PLEX KUMAMOTO協働事業
On the Corner
「Coby Channel トウヤマタケオ」

2014.11.14



シンガーソングライターのコビさん、ピアノ奏者アレンジャーとしても活躍されているトウヤマタケオさんの演奏とトークをお届けしました。コンサートは、Cobyさんのギターの弾き語りです。太陽のように明るいCobyさんの歌声が心に沁みます。トウヤマさんは、ピアノによるインストゥルメンタルや、言葉の響きが美しい歌詞をやさしく穏やかな歌声で聴かせて下さいました。背景には、幻燈ユニットとして一緒に活動をする画家masahiroさんの映像作品が流れ、会場はひとつ行われたこのコンサートでは、Cobyさん

月曜ロードショー上映報告

毎週月曜日14時・18時より 無料 定員90名

上映リスト(10/5~12/6)

10月6日	「ヴァンパイア」	1932年	アメリカ映画	71分
10月13日	「キートンのエキストラ」	1930年	アメリカ映画	93分
10月20日	「欲望という名の電車」	1951年	アメリカ映画	122分
10月27日	「奇妙な女」	1946年	アメリカ映画	98分
11月3日	「インフアナル・ミッション」	2008年	イギリス、カナダ映画	117分
11月10日	「ポテチ」	2012年	日本映画	68分
11月17日	「オードリー・ヘプバーンの初恋」	1951年	イギリス映画	94分
11月24日	「グッド・ハープ」	2010年	メキシコ映画	120分
12月1日	「ライク・サムワン・イン・ラブ」	2012年	日本、フランス映画	109分

の軽妙なトークでトウヤマさんの作品や人間像について迫りました。観客の皆さんには終始リラックスしながらコンサートを楽しんでいただけたようでした。(Y・M) 【参加人数40人】

街なか子育てひろば

子どもたちのためのイベントを開催しています

街なか子育てひろばイベント
色で心をリフレッシュ！

2014.10.11



子育てひろばの10月のイベントとして色彩心理についての講話とワークショップを開催しました。色彩心理インストラクターの方をお招きして、「こころを表わす色」や「色がこころに与える効果」などをわかりやすくお話していただきました。ワークショップでは、クレヨンを使って自分にとってのネガティブな感情、ポジティブな感情を画用紙に自由に描きました。それぞれイメージする色や線の描き

方にも違いがあり、それを鑑賞するものもいろいろ体験でした！いろんな色を使って絵を描くことで、自然と自分の気持ちが表れることや気持ちがすっきりすることを体験できる会となりました。(Y・M) 【参加人数12人】

街なか子育てひろばイベント
市外からの転入者の子育ておしやり会

2014.11.13



転勤などで熊本市に引越してこられた、子育て中のママさんを対象にした「市外からの転入者の子育ておしやり会」を行いました。転入された方の悩みと多いのが、赤ちゃんがいる地域のコミュニティと没交渉になりがちなこと、だそうです。今回の会では、以前住んだことのある土地のご当地自慢にはじまり、参加者同士で気兼ねなくおしゃべりに花が咲きました。ぜひ気軽なママ友を作って、子育てひろばや美術館にも遊びにきてもらいたいものです。(A・S) 【参加人数20人】

「天野喜孝展 想像を超えた世界」

天野喜孝 映像作品上映会〈第1回〉

2014.10.4



天野喜孝展関連イベントとして、天野喜孝映像作品上映会「画ニメ.. Fantoscope ~ tylosoma」(2006)をホームギャラリーで開催しました。天野さんが描き下ろした200枚以上の墨絵によって展開される因縁の物語は、大人のための寓話。皆さんモノクロームの幻想世界に引き込まれている様子でした。(K・O)

【参加人数70人】

天野喜孝展 プレマ&ファミリートゥアー

2014.10.11



天野喜孝展のプレマ&ファミリートゥアーを行いました。今回は常連さんのほかに目立ったのが、「昔から天野さんのファンだったんです！」というお父さんの姿。親子で初めての美術館体験が天野さんの展覧会だったことに感激もひとしおのようでした。タイムボカンからファイナルファンタジー、やさしいのようせいまで、親子2代で楽しむことのできる天野さんの仕事の長さ、幅広さに改めて感動したツアーになりました。(A・S)

【参加人数24人】

天野喜孝キャラクター コスプレコンテスト

2014.10.12



天野喜孝キャラクターコスプレコンテストを開催しました。出場者は8名で、熊本在住者はもちろん、中には茨城からかけつけてくれた方も。「吸血鬼ハンターD」や「ファイナルファンタジー」などから、それぞれお気に入りのキャラクターの手作りコスチュームをまつて様々な

ポーズを披露してくれました。また、表彰式には突如「ハッチ」に扮したくまモンが乱入！審査員長の天野さんや観客の皆さんを前に、くまモン体操を披露してくれました。コンテスト入賞者には、賞状の他、天野さんのサイン入りの展覧会カタログなど記念品が贈られました。当日は開館記念日という事もあり、多くのお客様にご来館いただき大盛況の一日となりました。(K・O)

【参加人数200人】

天野喜孝 映像作品上映会〈第2回〉

2014.10.19

天野喜孝展関連イベントとして、天野喜孝映像作品上映会の第2回目をホームギャラリーで開催しました。今回は、「画ニメ.. 鳥の歌」(2007)を上映しました。前作の重厚な墨絵によって描かれたモノトーンの映像から一転、今作では赤・橙・黄・青・

藍・紫・緑など豊かな色彩が、少年と少女の恋物語を美しく彩りました。今回も県内外から多くのお客様にご来場いただき、天野喜孝展をより深くご堪能いただけたようでした。(K・O) 【参加人数80人】



天野喜孝展 ナイトツアー

2014.10.23&26



恒例の商店街の皆さん向けのナイトツアーを開催しました。ナイトツアーとは、当館周辺の商店街店舗勤務の皆さんへ、日ごろの感謝をこめて、閉館後に学芸員とともに展覧会を鑑賞するイベントです。今回は20代・40代の若手世代が多いのが特徴でした。「初めて美術館に来ました！良い機会となりました」という声も多く聞くことができ、仕事に忙しい世代が美術館に来館する機会を増やすためのきっかけ作りをどのように展開するかを考える場ともなりました。(H・T)

【参加人数合計100人】

天野喜孝展 CAMKレクチャーカレッジ

2014.10.26

天野喜孝展の担当学芸員富澤治子によるレクチャーカレッジ「天野喜孝の世界」を開催しました。はじめに、展覧会準備から作品選定までを振り返り、どのように展覧会が構成されていったのかを紹介しました。続いて、天野作品の特徴とは何かを探るにあたり、描かれる主人公の特徴について解説。「時代を要請するヒーロー」、「時代

の理想を映す少女と女性」、「ひたすらかわいいキャラクター」の3種について、それぞれ代表する作品画像とともに言及しました。次に、天野作品にみられる西洋近代美術の勉強からの展開と題し、舞台芸術や挿絵芸術の参照(パレ・リュスの衣装デザイン画とFFキャラクターデザイン画の共通点など)や、モノクロ作品ならではのダークな描写、イラストレーションの構図の研究、色彩の魅力やにじみ・ぼかしなどの技法の研究などを指摘。最後に最新のシリーズから「DEVA [LOKA]」には過去作に芽生えたものの集大成がみられること、「Candy Girl」には「だまし絵的な遠近法からの逸脱」、「形態の自由」などさらなる展開が垣間見られることに触れ、展覧会のより深い楽しみ方を紹介しました。(H・T)

【参加人数60人】

天野喜孝展 入場者1万人セレモニー

2014.11.5



天野喜孝展の開幕から40日目。入場者数が1万人を突破しました！記念すべきお客様は、天野さんファンのご夫婦でした。天野さんの絵をご自宅に持つておられるそうで、この展覧会をとても楽しみにされていたとのこと。セレモニーでは、当館館長より展覧会カタログが送られ、学芸員の解説案内とともに本展をお楽しみいただきました。(Y・M)

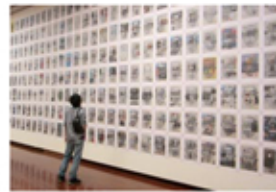
パリにはパリでしか描けない
自画像がある、のどそうです。



「鉛筆のチカラ 木下晋・吉村芳生」展

「鉛筆のチカラ 木下晋・吉村芳生」展 開幕

2014.12.6
-2015.2.8

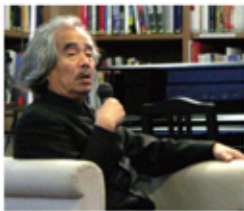


鉛筆の魅力に取りつかれた画家、木下晋さん、吉村芳生さんの二人展が始まりました。木下さんは、10時から10Bまでの鉛筆を駆使し、最後の替女（こぜ）と言われる小林ハルさんやハンセン病元患者桜井哲夫さんなどの心の闇までを描ききった作品群で知られています。一方、吉村さんは、新聞は日々の鏡であるという言葉を残されているように、新聞紙に自画像を描くシリーズや、身の回りの草花の中に人間の生死を汲み取り色鉛筆で克明に描いた作品などを制作されました。両作家とも、鉛筆で描いたとは思えないほどの作品サイズ、量で圧倒的な鉛筆のチカラを感じさせてくれます。いつも使っている鉛筆を見る目が変わってしまうかも？ぜひ実物を確かめてみてくださいね。(E・Z)

木下晋
アーティストトーク

鉛筆のチカラ展の出品作家である木下晋さんのアーティストトークが開催されました。初日とはいえこの冬一番の寒さの中、たくさんの方が聴きにきてくださいました。

2014.12.6



鉛筆画を始めたきっかけや、モデルとの関わり、「オリジナリティとは何か？」といった、木下さんの制作姿勢が垣間見られる話に、みなさん満足そうなお様子でした。「コンプレックスを作品にしてこられた先生の心境の変化やご自身に対する気づきにも私はととさせられました。」(40代女性) (アンケートより) (E・Z) 【参加人数80人】

アートバス①
「芳野小学校」

2014.10.29



本年度からスタートしたアートバスは、熊本市内の交通の便の悪い小学校などを対象に、美術館がバス代を負担し、子どもたちに美術館で美術鑑賞やワークショップ等を体験してもらおうという事業です。本年度最初の利用は西区の芳野小学校の1・3年生の皆さんでした。開催中の天野孝孝展を皆で鑑賞し、午後から「自分だけのキャラクターをつくる」ワークショップを行いました。スケッチをもとにモデリング、色塗りまで思い思いの作品が出来上がり、楽しい時間をすごしました。(A・S) 【参加人数24人】

アートバス②
「山本小学校」

2014.10.31



2回目となるアートバスでは、北区植木町の山本小学校の1・2年生の皆さんがやってきました。造形活動がありきたりなものになってしまいがちということで、講師にアーティストの浅井裕介さんを招いてマスキングテープを使った絵を描くことになりました。最初はなかなかペンが進まなかった子供たちも、浅井さんの描く姿を見ると、どんどん描き進めるようになっていきます。最終的には、カラフルな鳥や地面からよきよきと生えた大きな木を、マスキ

アートバス③
「城北小学校たんぼほ学級」

2014.12.11



3回目のアートバスで、城北小学校たんぼほ学級の皆さんがやってきてくれました。オーブンしたばかりの「鉛筆のチカラ」展で、木下晋さん、吉村芳生さんの作品を皆で一緒に観た後、実際に木下さんが使われている10Bから10Bの鉛筆を使ってケント紙に試し塗りをしたり絵を描いたりしました。10Bの鉛筆のするすとした描き心地に、皆でびっくり。子どもたちは、気づくと窓から見える手取教会をスケッチしはじめたり、アメリカの画家サイ・トゥオンブリのような文字だけの絵ができていたり、飽くことなくずっと描いていたのが印象的でした。(A・S) 【参加人数23人】

井手宣通記念ギャラリー
安本亀八《相撲生人形》
特別展示「人体と計測」

2014.11.19-12.21



井手宣通記念ギャラリーの冬の展示として、安本亀八の《相撲生人形》を特別展示しました。今回の冬の常設展示のテーマは「人体と計測」。安本亀八《相撲生人形》は不安定でアクロバティックなポーズのため、作品のすべての重さが宿禰の両足にかかりますが、重心の非常に安定した構造であり、3本の脚の配置は美しい3角形を描いて

GⅢ

ギャラリーⅢ(GⅢ)は、熊本、九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです。

パーブルーム大学
オープニングパフォーマンス

2014.11.22
-2015.2.8



ギャラリーⅢの1000回目となる展示「パーブルーム大学Ⅱ」展がスタートしました。この展覧会は、熊本出身の画家・坂本夏子を中心に、県内外の若手作家23組が集まるグループ展で、「パーブルーム大学」という架空の美術大学をテーマに、絵画に映像、ドローイング、ゲームやアニメ、インスタレーションなど、数点にも及ぶ作品が会場を埋め尽くしています。オープニングとなる23日は、参加作家たちによるパフォーマンスや、上通のギャラリーⅢで「パーブルームの夕べ」というパーティーも行われ、多くのお客様が足を止めて見入っていました。(A・S) 【参加人数50人】

ています。松本喜三郎の貴重な資料「万宝帳」には、女性の裸体図が描かれており(正面半分と横)、手首の幅や太ももの幅など、事細かに寸法が記載されます。実寸もしくはやや縮小サイズでの制作の記録(身長約124cm)とおもわれます。北川健次の版画作品《反対称鏡・蝶番・夢の通路 VERO-DODAT》を通り抜ける試みでは、フランツ・カフカやアルチュール・ランボールの青少年時代の写真、シエイクスピアのデスマスクなど、作家が長年好んで使用するモチーフとしての男性の身体が数学的図形と重ねられ、分析的な謎解きを行うかのように、芹川光行の作品《函に棲む影》は、直線と色面とで構成される幾何学的な要素の強い空間のイリュージョンの中に、みずからの身体シルエットを映し描き、奇妙な生々しさとユーモアを演出するものです。以上の作品を含む10点の作品を展示しました。(H・T)

ART DE GYAN

アート・どぎやん。

*熊本弁でアートはどやなの？という意味です

河原町アートアワード2014

2014.10.12

河原町織維問屋街一帯
熊本市中央区河原町2番地



「河原町アートアワード」は、熊本の次世代アーティストが腕を磨くステージとして、河原町の織維問屋街を舞台に2009年から毎年開催されているアートアワードである。アート関係者や地元企業などが審査員を務め、各自が評価した作品に対して賞を授与する。「現代アート部門」と「文化市場部門」という2つの部門に分かれており、今回はそれぞれ25組、11組がエントリーしていた。

現代アート部門では、小林駄々さんの祭壇のような呪術的雰囲気、とりわけ見る者を逆に呪い返し、威嚇するような目玉の群れが非常に印象に残った。また、たろさんの「繋がる人口」は、織維問屋街に見られる郵便受けを生かした作品で、届かなかった手紙（言葉）というモチーフをもとにしたイメージのふくらみが秀逸だった。

一方、文化市場部門は、自主制作維

貨から紙芝居パフォーマンスまで内容は様々。MAKOTO IWAKIさんのブロックで組み上げる服や、岡崎一さんの写真からその人の頭蓋骨の形を再現するというサービス(?)など、こちらも目を引くユニークな活動が少なくなかった。

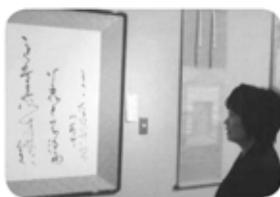
両部門ともに刺激的な展示を数多く目にする事ができ、今後の展開を期待させる。また今回、「自分は作家として生きていきたい」「創作に専念したい」という意欲を見せる出展者にも何人か出会った。今後とも彼らの活躍に注目し、また応援していきたい。(G・S)

第30回 書道溪風会展

2014.10.21-26

崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町10-25

096-323-1158



書道溪風会展は、崇城大学ギャラリーで30年前に川俣溪石さんが始めた書道展であり、川俣さんの亡き後、河田三和子(会長)が継いで今日に至っている。今回は、69人の会員が72点の主な作品を見せていた。河田会長は、若山牧水の短歌の額と大伴家持の和歌の軸を変化に富む用筆でうまさを見せていた。西本睦子さんの若山牧水の歌、浜

光さんの与謝野晶子の歌のかがやきを見せる作品となっていた。昨年86歳で病死された川俣溪石前会長の遺墨展も併催されていた。斉藤茂吉の歌の額や石川啄木の扇面の軸など18点の作品は力強く変化に富む流麗な線で書かれておりさすがである。日展常務理事の黒田賢一さんの賛助出品もあった。(S・K)

清水天山 生誕百年展

2014.10.28-11.3

熊本県立美術館・分館
熊本市中央区千葉町2-18
096-351-8411



熊本市出身の書家で87歳で亡くなった清水天山さんの生誕百年記念展が開催された。天山さんは済々斎高校の教員として30年以上書道を教え、熊本県書道教育会を起し、熊本県の書道振興に努めた。昭和33年に第一回日展に入選し、独立書道会(東京)となり、毎日書道展の審査員もつとめ、中央書壇でも活躍した。古典を基に、造形性のある大字書や、多字数書を発表してきた。

第30回 森田曉美 デコパージュ&エッグアート展

2014.11.26-12.1

アトスヘイス大空堂
熊本市中央区上通町5-6
096-354-2155

森田曉美さんらによる作品展。年に1回開催しており、今年で30回目を迎えた。デコパージュは、紙や布を写真に描かれた絵や模様を切り抜き、物の表面を貼って飾る技法のことをいう。実際に絵を彩色することがないため手軽なこと、そして模様を組み合わせてよって

MUSEUM INFORMATION

「アーティスト・イン・阿蘇」 アーティスト・トーク

2014.10.25

熊本県の「海外アーティスト招へい事業 in 阿蘇」に参加したアーティスト7人のトークがホムギヤラリで開催されました。前半は、スライドやビデオを用いながら、アーティストの皆さんが8月末から阿蘇に滞在して制作した作品について紹介していただきました。後半のトークセッションでは、阿蘇の自然の豊かさや、滞在した町で出会った方々とのエピソードなどがうかがうことができました。素材としての小園杉の素晴らしさや、古い酒蔵や屋根裏部屋といった歴史の刻まれた場所を舞台に制作を行えたことの感動など、阿蘇での素敵な出会いを皆さん思い思いに語ってくださいました。レジデンスを通して生まれた作品はこの後、10月30日・11月1日に阿蘇市内牧の旧大津酒造での展覧会で発表されました。(G・S)



【参加人数20人】

インクルーシブ・カフェ in 熊本

2014.11.1

文化庁委託事業「平成26年度戦略的芸術文化創造推進事業」として、「インクルーシブ・カフェ in 熊本」が開催されました。インクルーシブ・カフェは、「障害者の芸

術表現」をテーマにいろいろな立場の方々が自由に話し合う場として、大阪市を中心に開催されています。今回初めての出張カフェということで、スローレーベルディレクターの栗栖良依さんをゲストにお招きしてお話いただきました。



障がい者と企業とアーティストを経営者の視点からつないで、商品、仕事にしていくという内容に、参加者からは「もっと聞きたい!」という声が上がっていました。

「施設の人も販路が見えていると乗ってくれる」というホンネ(?)まで語っていただきありがとうございました。(50代女性)アソケイトより (E・Z) 【参加人数53人】

アートプログラム 〈西原小学校3年生〉 レインボープラン

2014.12.10



熊本市東区の西原小学校から、ダイナミックな造形活動をしたという相談があり、3年生120人がアーティストのレインボー岡山さんと一緒にワークショップをする

ことになりました。レインボーマンから小学校宛にきた手紙をもとに、どんな虹を学校にかけたいか、子どもたちが返



デザインが無制限に
つくられることから
人気が高い。会場
には、デコパージュ
された屏風や椅子
などが展示され
た他、石鹸やメガ
ネケースも展示さ
れ、日用品に彩りを添えるデコパージュ
の可能性の高さがうかがえた。

また会場にはエッグアート作品も展示
されていた。エッグアートは鶏やダチョ
ウなどの卵をくりぬき装飾したものであ
るが、もろい殻を美しく装飾してあり、
繊細で丁寧な作業が見て取れる。
会場には季節に合わせてクリスマスや
新年を迎える羊の置物の展示もされてお
り、見る人の目を惹きつけていた。(H・Ts)

町の写字室 カリグラフィー作品展

2014.11.30-12.7

でんでん舎

熊本市中央区磯浜町45早野ビル1F



カリグラフィー
制作教室「町の写
字室」のメンバー
10名による作品
の展示会。カリグ
ラフィーは、アル
ファベットの文字
を美しく見せるた
めの技法であり、その意匠を凝らした表
現はまさにアート。会場に入っただけ
目をついたのは、天井から吊り下げら
れていたヴェールのような潇洒な作品。そ
の他にも、それぞれの作家が選んだ言
葉や文字、紙、インクによって、個性あ
ふれるカリグラフィーの作品が並び、神
聖さと優しさに包まれた素敵な展覧会
だった。情報を伝えるという機能が重
視される文字が、今回の展示のように見

第16回熊本県 独立書人団展

2014.12.2-7

崇徳大学ギャラリー
熊本市中央区花畑町10・25
096・3263・11508



東京独立書人団
の熊本県支部の書道
展が崇徳大学ギヤ
ラリーで開かれた。同
支部会員25人の漢
字や少数数作品の大
作、古典の臨書作品
など50点に、中村太
湯支部長の個展「書の彷徨」21点も併
催されていた。古典を求めた漢字臨書
作品や漢詩による変化に富む多字数作
品、文字の成り立ちを考えて造形した少
字数作品など、多彩でダイナミックな書
が会場に満ちあふれていた。徳水果鴨さ
んの「生駒」、河内東壁さんの「遷」
が印象に残った。中村太湯さんの書の個
展は「生きていく今を書きたい。書は、
生きる力だ」として釈文に漢字への思い
を託して、大作にしていた。中国の金文
（周時代の青銅器に記した漢字）でタツ
チも大きく躍動して流れる黒線は、力
強く会場を圧していた。(S・K)

小野彩香フェルト展―帽子―

2014.12.8-17

Gallery Moe

熊本市中央区新市街13・24
096・3263・69000

た目の美しさからデザイン性を追求す
ることで、読む言葉（文字）からそれ自
体を鑑賞するものへと印象が変わるの
もカリグラフィーならではのもの。文字
の形や色を目で追っていくと、言葉の意
味合いと重なり、だんだんと作品の世界
観に惹き込まれていった。(N・H)

Muneo 風まかせ展

2014.12.8-12

コミュニティプラザU

熊本市中央区水道町3・37
096・3266・0844



林田宗雄さんによ
る絵葉書の作品展。
会場は、上通郵便局
内に併設されたギヤ
ラリーで、江津湖周
辺の風景や草花を描
いたのが絵の展覧
会。ハナダイコンや
リンドウ、ツユクサなどの江津湖の自然
を、水彩のみずみずしい透明感と素材で
柔らかな線で明るく描き出していた。会
場には40点の作品が並び、街の片隅に自
然の潤いを与えていた。(K・O)



フェルトア
ーティスト小野彩
香さんによる
4年ぶりの展
示会。彼女は
織物やバッグ、
そして真鍮や
銀を使った手作り時計なども手掛ける
が、今回は帽子を中心に展示された。展
示作品には立体的に渦を描くものや、風
にたなびくような造形もあり、帽子の機
能性を兼ね備えながらアートの一面も染
み出た帽子が揃えられていた。こうい
つたアートあふれる作品は海外でも人気
があるという。

つば付きからヘッドドレス風の帽子ま
で展示されていたが、作家自身は帽子の
前側や後側を決めておらず、使う人がか
ぶって似合う位置を探すといい。フェル
トの暖かさが感じられると同時に、触れ
てみると意外にも重さはなく軽いフィッ
ト感を楽しめる。(H・Ts)

編集後記

寒すぎて毎朝布団から出るのが苦痛
な今日この頃、「もう布団にくるまっ
たまま生活したいよー」という気持ち
になってしまっています。そこでふと思
い出したのは、昔の人は日中着ていた服
を、夜はかけ布団にして寝ていたとい
う話。それって要するに、昼間は布団
を着て歩いていたらというのと同じでは
ない。十二単なんて、あんなに重たくな
るまで衣装をたくさん着込むとは体を
張ったおしやれだなあと思っていまし
た。が、布団を着ていたのだと思えばな
んだか納得がいく気がしたのでした。
やっぱり昔の人も着たかったんですね
。布団。。

編集長 佐々木玄太郎

先日、ドラマチックな出来事が起
りました！現在、当館ギヤラリーⅡ
では「鉛筆のチカラ」展、ギヤラリー
Ⅲでは「パーブルーム大学Ⅱ」展を開
催中ですが、その出品作家吉村芳生さ
ん(GⅠ・Ⅱで展示)と石井友人さ
ん(GⅢで展示)は、バリ留学中にも
たまたま同じアパートの上下階に住ん
でいたのだそうです。その話を聞いて、
当館の展示が2人のパリでの出会いの
続きのような偶然を感じました。さら
に石井さんは吉村さんから、「鉛筆の
チカラ」展で展示中の「1000枚の
自画像」のうち一つの作品、「1001
枚目の自画像」をプレゼントされてい
て、今回その作品も展示させていただ
くことになりました。偶然が時を超え
て巡り合うという奇跡にワクワクしま
した！

担当 大田黒翔代

Visitor's letter

アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します

- 「天野喜孝展 想像を超えた世界」
- ・ゲームが好きで天野さんの作品を見たいと思って
いたのでとても感動しました。(熊本県・40代・男性)
 - ・友人に誘われ一緒に来館しました。天野さんの作
風が自分好みのある事を知り、これを機会にも
っと拝見したいと思いました。(熊本県・10代・女性)
 - ・違う世界に迷い込んだようで、本当にここは現実な
のかという気持ちになりました。(福岡県・20代・女性)

【参加人数 120人】

事を書きました。それをもとに、スズラ
ンテープ、風船、エッグライトを使った巨
大な虹の作品を、子ども達とレインポー
ンが作り上げました。作り上げた空間にみ
んな大満足。全校生徒の皆さんも休み時間
に見学に来てくれて、その出来栄に驚い
ていました。(A・S)

- 【執筆名義】*原稿の文末にイニシャル表記
- 兼城昌山(S・K)【書道家】
 - 藤原江美(E・Z)【熊本市現代美術館主任学芸員】
 - 高澤治子(M・T)【熊本市現代美術館主任学芸員】
 - 藤本朋子(A・S)【熊本市現代美術館主任学芸員】
 - 芦田彩英(A・A)【熊本市現代美術館主任学芸員】
 - 佐々木玄太郎(G・S)【熊本市現代美術館学芸員】
 - 丸吉ゆかり(Y・M)【熊本市現代美術館学芸員】
 - 平原奈津美(N・H)【熊本市現代美術館学芸員】
 - 大田黒翔代(K・O)【熊本市現代美術館学芸員】
 - 塚本春菜(H・T)【熊本市現代美術館学芸員】
 - 林加美瑠(K・H)【熊本市現代美術館学芸員】
- ART KISS LETTER アートキッスレター
〒702号(2015年1月)【無料】
発行人：桜井武
編集：佐々木玄太郎 大田黒翔代
副編集：石井克昌(MOROSHINA) 印刷：シモタ印刷
発行：熊本市現代美術館 <http://www.cankk.or.jp>
〒960・0844
熊本市中央区上通町2・3
電話 0966・2778・7500
ファックス 0966・3599・7892

【次号は春号(3月発行予定)】

WORLD NEWS

2014年秋冬ロンドン レポート



2014年秋冬のロンドンのアート

シーンを、少しずつではあるがご紹介したい。秋の恒例となった「フリーズ・アートフェア」は、世界各地から160以上のギャラリーが出席する国際的なアートフェアだ(図1)。特徴的なのは、古代芸術から2000年以前に制作された作品までを現代的視点で紹介する「フリーズ・マスターズ」が同時開催されることである。「アートフェア」は最終日にはチケットが完売となるほどの盛況であり、日本のUNITED BROTHERSによる福島の野菜を扱ったパフォーマンスは多くの議論を呼び、「マスターズ」では古代ローマの石像、ピカソの油彩画、そしてマルボロ・ギャラリーによるフランス・ペーコンの大規模展示まで、贅沢な空間を訪れる者に提供していた。

また、この時期の代表的な現代美術のイベントとして、今年30回目を迎えるターナー賞の発表がある。ターナー賞は、テート(テート・ブリテン、テート・モダン、テート・リパブル、テート・セント・アイヴスの4つの館で構成される国立の美術館群)が主催する、現代美術の分野で活躍する50歳以下のイギリス在住、出身者に加えられる賞だ。1984年から始まり、

毎回4名程度がノミネートされ、それらの作品がターナー賞展として展示される。会期中に受賞者が発表され、授賞式の様子はテレビで生中継される。これまでの受賞者には、リチャード・ロング、ダミアン・ハースト、スーザン・フィリップス、そして2014年にアカデミー賞作品賞を受賞した映画「12 Years a Slave」でも夜は明ける」の監督ステイブ・マックウィーゼンターは、「12 Years a Slave」で主人公を演じた俳優のキウエテル・イジョフォーが務め、受賞者は、映像作品「The Look of Silence」が高く評価されたダンカン・キャンベルとなった。この作品は、第55回ヴェネツィア・ビエンナーレのストランド館で上映されたが、これまでの歴史や定義に関わる映像を再編集したり、新たなパフォーマンスを加えたりしながら、既存の歴史やイメージの語り、見方に疑問を投げかける高度に洗練された作品だ。会場には同作家によるドイツの画家ジグマー・ボルケにインスパイアされた映像も展示されていた。くしくも、テート・モダンでは、ボルケの大型個展が開催されており、両方を見ることでボルケの作品の見方も変わるかもしれない。

テートのニコラス・セロータ館長は、発表前のインタビューで現代美術の表現の多様性と可能性、そして国際的にも大きな影響を与えるターナー賞の意義を、ステイブ・マックウィーゼンを例にして述べたが、マックウィーゼン活躍はこの30年の節目に大きな花を



図3

添えることになった。そしてターナー賞展と同時に開催していたのが、賞のタイトルにもなった、イギリスを代表するロマン主義の画家ターナーの大規模個展だ(図2)。本展では、ターナーの代表作(雨、蒸気、速度、グレート・ウェスタン鉄道)(1844年、ナショナル・ギャラリー、ロンドン)の他、後期の作品が約1000点展示され、ターナー賞展と併せて鑑賞することで、イギリス美術の過去から現在までの歴史の一端を感じることができるよう構成ともいえるだろう。



図2

さらにこの時期、日本の現代美術を牽引する作家達の個展も相次いだ。デリー・アート・センターでの奈良美智、パウル・ユニット・ロンドンでの大竹伸朗、ダイワ・ファウンデーションでの横溝静、ペース・ロンドンでの杉本博司などである。奈良展については(図3)、以前当館の個展で紹介した作品も出品されていたが、開放的な空間のなかで、絵画、立体、ドローイング等の作品が伸びやかに展示されていた。彼の描く少女の目はより奥深い輝きを湛え、表情は二層豊かなものになっていた。また、国際交流基金のロンドン支所でもあるジャパン・ファウンデーションでは、日本の芸術文化を紹介する興味深いレクチャーやアーティスト・トークが多く開催されていた。筆者が聴講したレクチャーは、アリス・モード・ロクスビー、ファルマス大学写真学部長による「美学学校・反アカデミー」と題されたもので、東京の美学学校を中心に、ハイレッドセンターの活動も交えつつ、1960-70年代の世界各地のオルタナティブ美術学校の活動やそれらが社会に与えた影響について語られた。彼女は、日本の美術界、特に美術館では、政治的なもの、社会的なもの、を主題とする、議論を呼び起こす作品を取り上げられない傾向にあること、また作品が収蔵されていても活動を紹介する資料類などの保存の不足といったアーカイブ化の遅れがあることを指摘したが、これらは今後の美術館活動を考える上で示唆に富んでいた。

ニューヨークやパリではコレクション展、企画展に関係なく有料のところが多いにも拘わらず、物価の高いロンドンにおいて、大半の美術館、博物館、アーティストが展示を無料で開放している(館のコレクションではない企画展は別途料金がかかる場合もある)ことは特筆に値する。公立であるバービカン・アートセンター(図4)やホワイトチャペル・ギャラリーの展示は無料鑑賞可能で、読書もできるパブリックスペースもあり、多様な年代の



図4



図5

市民が思い思いに過ごす姿が散見される。また、コレクターやキュレーターらが設立した私立のデリー・アート・センター、パウル・ユニット・ロンドン、レイベン・ロウ(図5)を始めとする非営利のアーティストスペースも質、数ともに高いレベルだ。その背景の一つに、イギリスでは、国や自治体のサポートに加え、多くの助成金や寄付に支えられながら事業を行う制度が発達していることが挙げられる。奈良展、大竹展のようなボリュームのある展示内容を無料で見る機会は日本ではなかなかないだろう。幼い頃から気軽に良質のアートに親しむ、イギリスの文化政策の一端を、今回の滞在で改めて認識させられた。(A・A)